壱馬俗

之

特別
14
1919
165

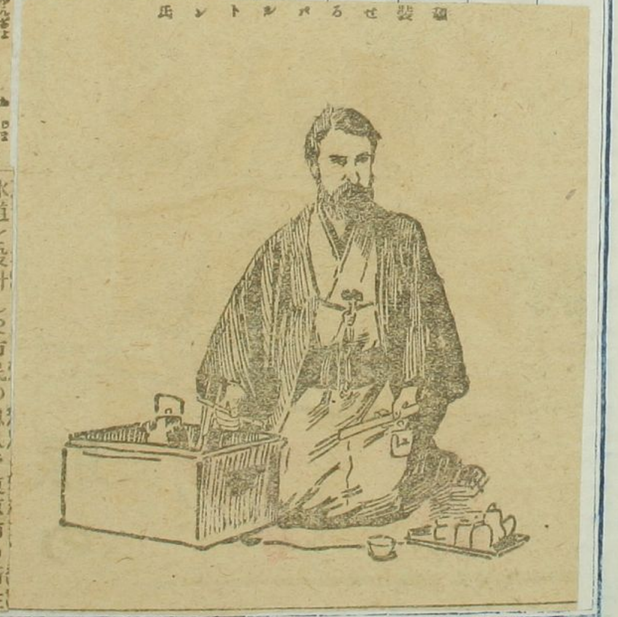
38- 8964

176442

東西の二傑（一）

（鹿島と光村）

寫眞が今日の如く素人界に流行するに至つたのは大いに原因のあることで、これが原動となり鼓吹者となつた人物のあることを忘れてはならぬ、寫眞營業者の近來發生するも驚く許りだが、素人寫眞家の日に月に殖えるには更に驚かざるを得ぬ、是は畢竟斯道の趣味あり有益なる所以の大太鼓を叩いて素人界を風靡したる結果で即ち此太鼓を叩いた本尊は前には鹿島清兵衛（東京）後には光村利藻（月）の二人である、二人は富豪の家に生れ寫眞の趣味に全力を傾け金錢に代へらるゝとならば、あらゆる鏡玉、器械の精選を全たからしめ高價を厭はず新式を輸入し、これを實際に試み商賣人さへ未だ爲し得ざる撮影を爲し、以て斯道の趣味あり有益なることを江湖に示したのであるから、天下は



鹿島せるバルトン氏

翕然として寫眞の趣味に傾注し終に今日の大流行を來した次第である併し世には道樂に過ぎ終に家産を倒すに至りしとの非難は免がれぬが、斯道の上から觀れば此人ありてこそ今日の進歩發達を來した所以で、若し夫れ明治の寫眞史を編せんとせば彼等は慥かに史中に特筆大書さるべき人物たるを失はぬ、今や何事も寫眞の伴はざるはなき世の中、いでや斯道の方面に於ける二人の爲せし跡を觀ん

◆バルトン先生

先づ順序として鹿島の力より述べるが、それには先づバルトンの話しから始めねばならぬ、バルトンは英國人で我政府に用ゐられたのは彼れが衛生工學博士の技倆である、彼れは實に都下の水道を設計した市民の恩人で東京市の衛生工事に貢献したとは今更説く迄もない、彼れは兼て寫眞術に精通し其本國に於ての著書は有名なもので、本邦へ來つては前言ふ如き事業が專門であつたが平生閑あれば斯道を樂しんだので終に鹿島の知る所となり

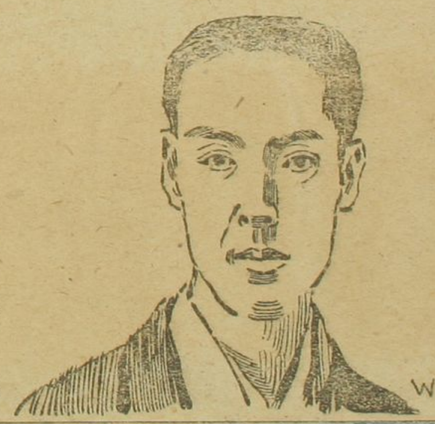
鹿島は之に師事して眞面目に研究を遂げたのである

▲鹿島の道樂初め　清兵衛は世人の熟知する有名な新川の酒問屋鹿島家へ養はれた人で其實家は大阪の鹿島家である、養父が元來島眞好きで素人としての器械は總べて遺物となつて在つたので清兵衛も見よう見まねに覺え知ず〳〵乘氣となり初めは自宅の寫眞場で樂んだのが例の玄鹿館てふ大仕掛なハイカラ寫眞舗となつたのであるが、最初は淺草境内の寫眞師松林堂に就いて稽古し、性來の凝性は追々募り斯道の先生を探がす中、彼のバルトン先生を發見したのである、本邦人として學理の方面より斯道を研究したのは故理學士石川巖君で、鹿島は勿論石川に就て理窟も聽いたのである

▲金力づく　明治十六七年頃の話しであるから寫眞に關するとは一切不完全極つたもので、唯々〳〵寫眞屋に任せ形式の撮影に止まり改良の進歩のと云ふとは思ひもよらぬ際彼れ鹿島は一方にはバルトンや石川巖を學理上の顧問として當業者側よりは今の呉服橋外の待乳、近年北京で營業しつゝある山本鎖七郎や小川一眞などを手下に遣ひ金錢を散布し、世間で出來ぬ斬新な撮影を爲したのだ、外國人でフキノロサ及びダイバース、コンドルなども寫眞に趣味を有し矢張鹿島と往來したが、バルトンは實に熱心で親切で殊に日本趣味を有して居るので鹿島は殆と親の如く尊敬し斯道の研究に夜も日も足らぬ程熱中したのである、バルトンが不完全極つた當時に能く話し相手となつたのは鹿島が金錢に不自由なく思ふ存分に器械を買ひ得られたからであつた

▲素人團体の嚆矢　其頃素人寫眞家として知られたのは近衛（篤麿）二條（基弘）の二公、德川侯（篤敬）戸田、龜井、有馬（頼萬）の三伯、岡部、青山二子等の華族連であつたが豪華に道樂したのは鹿島一人で隨つて素人界は彼れを中心に騷き立たものである、寫眞協會てふ團体の創立されしも此時で德川侯を會頭に二條公を副會頭に戴き、寫眞品評なども催ふされ其熱度の高き丈中々今日どころではない總て大業な遣力であつた

▲京都の發會式　鹿島と云へば金持で舊家本家たる新川の養子であるから思ふ存分勝手なマネが出來たのである、性質至つて溫厚で人を世話するが持前であるから、お幇間半分に出入するもの藝人は勿論のと種々な方面より彼れを圍み煽り立てたので、根が派手好きと來て居るので堪つたものではない、次第に夢の道樂は寫眞撮影を中心に



鹿島清兵衛

豪華を極め一時は實に一世を驚かしたものである、寫眞協會の發起人は皆當世お歴々の華族連であつたが之を活動せしめた本尊は彼れで各地方の同好者と氣脈を通じ到る所へ支部を設置した、其設置万端の費用は皆彼れの散財で發會式などには非常な景氣を添へたものだ、殊に京都の發會式には揃ひの浴衣で滝車數輛を買切り樂隊を載せドンチャン囃し立てゝ乘込んだ景氣なぞは素晴しいものであつた

▲英國の會社を驚かす　寫眞の贅澤は日本に有觸れたものでは妙でないと言ふ位益々増長し、英國のマリオン會社へ全紙四倍掛（四間四方）の乾板四五打を注文した、會社も變に思ひ日本でコンな乾板の實用さるゝ筈がない、これは何かの間違ひであらうと態々問合せたが、終に事實と知れ一驚を喫したそうだ

（たんぽ）

▲夜中の御葬式　其頃の鏡玉はダルメヤ位負であるから優の狂言となると殆ど夢中で其頃の夜間撮影は頗る斬新と稱されたものである、御道筋に千五百燭の電氣燈を點じ

アナスチグマットマットを輸入し、是も其頃未用ゐられぬ白金アリストを米國より取寄たものだ、彼の英照皇太后御葬式の夜景撮影を承つた折なぞの業は中々本業商賣人も及ばぬ所であつた、今日でこそフラッシライト（夜間撮影）も珍しくなくなつたが、

に限られたものだが、彼は卒先してゴルツ、

器械を置く足場から万端の準備は非常なもので首尾よく出來の上献納したのである、金錢を湯水の如く費しつゝ遣る仕事であるから何事をも爲し遂げられぬとはない、寫眞に此位金を掛けたのは前後に彼れ鹿島程の好事家はないのである

▲團十郎の不動　電光を劇場に應用し初めたのも彼れで、市川團十郎が日蓮記を勤め折の龍口に電光を用ゐると、又去廿六年頃明治座で同優の不動に例の火炎を幻燈で輝かしたなぞは有名な話しで元來團洲場

▲英國に於ける名譽　バルトン先生の斡旋で日本の景色寫眞數十葉を英國寫眞協會へ寄附したるともある同協會は英國の紳士淑女より成る立派な團体であつて、バルトンより鹿島の性質から寫眞に關する熱心の程委細報告に及んだので、同協會は其の機關雜誌に鹿島の肖像を掲げ、日本の富豪は兎角婦人に關係し醜聞を流がすが常なるに、ミストル鹿島は專念斯道に貢献する精神感ずべし」との記事を添へたのである、尚同協會は之に報るに同國の景色寫眞數十葉を鹿島に贈り越したので彼れは之を東京及び名古屋、京都、大阪等に回送し展覽會を開き公衆をして觀覽せしめたのである

▲玄鹿館の大仕掛　寫眞研究の時代も通り越し獨道樂でもあるまい商賣人として公衆の需めに應せんと氣を替へ木挽町五丁目に木造塗家の寫眞館を新築した間口十間に奥行十五間の洋風二階建裝飾萬端は例の小林

義雄の手にて一万圓餘も掛けし丈燦爛目を奪ふ許り撮影場は廻り舞臺で書割代りに芝居の道具を遣ひ樂屋には本職の藝人控え客の望に任せ時代、世話物着付の後見すると云ふ疑方なれば、來客も隨つて普通の撮力では異でないと拈りくねる通筋多く、西洋人のお客に對する通辯もあれば道具立に關する繪師もあり、夜は二千五百燭の電燈を點じ夜業を爲し、別室には食堂ありエレベートルで花月其他より取寄する料理辨當を運び、酒は自分の新川本宅より飛切の一示孤冠の鏡を拔く始末客は撮影の上馳走になりホロ酔え加減で飛び出すのであるから主客顚倒客の方から主人の鹿島にビヨコ〳〵低頭する有樣だ、市川一門の俳優は日々遊び半分御馳走頂戴に罷り出でワイ〳〵騷ぎ立つるのであるから如何に富裕の若旦那でも堪る譯がない、明治二十八年開業し散々飲潰され四年間の籠城は寧ろ不思議な位、卅二年どう〳〵落城したのである

▲帶、半襟、烟草入　白金アリストが日本に行はれたのは鹿島のお蔭で、玄鹿館の寫眞と云へば普通の寫眞と著しく相違し世人はスル「と叫んだものだ、曾に紙質に止まらず帶地、半襟、烟草入なぜへも寫眞を燒付け之を三井呉服店に命じ廣く販賣せしめ、又銅器にも之を燒付け玄鹿館落城時代に漸く之が成効を見たのである

▲景色、風俗寫眞　今日尙坊間に賣廣まつて居る景色、風俗寫眞は多く玄鹿館時代の乾板であるが、此乾板は多年鹿島に愛せられた寫眞師で現今銀座三丁目で開業しつゝある岡本六平の所有になつて居る、即ち一尺に二尺の景色五百通り、八寸に九寸五分の寫眞が一万通りもある、鹿島の性質に取る所は己が苦心し經營した跡を當業者に與へて遣るので、彼れがお蔭を蒙つて借金を片付け今日盛大に營業しつゝあるものがある、而かも此等社會の溝情なる彼れ鹿島の境遇と更に關せざる焉で其鴻恩の万一に酬ゆるとも知らぬ馬鹿漢許りとは情ない譯けである

▲和洋折衷音樂　寫眞の外に音樂の道樂もあつた、和洋折衷の音樂を劇場に用ゐたのも彼れが采配で、二人道成寺、勸進帳などで杵屋六左衛門の長唄と西洋音樂の合奏は、彼の北村に命じて樂譜迄作らしめたのである、樂器も大金を投じたものだが其遺物ピヤノは今や酒井伯と東京音樂學校とに珍藏されてある

▲今は銀行員　彼れは前來述ぶる如き一種の大道樂家で寫眞と音樂の爲めに盡した功勞や沒すべからずだ、博文館連中や文士界に素人寫眞の勃興したのも彼れが原動となつた次第で、博文館の故乙羽君や水哉君なども鹿島の造方を見て初めて趣味を感じたものだ、而して彼れが失敗談は今更繰返すの必要がない、唯々彼れが大金を散じて騷いだ結果が今日の流行を來したる譯であることを記すに止めよう、尙彼れは健在で而かも謹愼的に某銀行に勤めつゝある

光村利藝

て海濱業で金を拵へた多額納稅者である、先年死去した後其遺産を擁しつゝ縱橫無盡の道樂は鹿島の派手には及ばぬが、寫眞を中心としての遊び方は鹿島落城後此光村の右に出づるものもないのである

▲初陣の用意　玄鹿館全盛時代には赤坂田町七丁目の僑居で慶應義塾へ通學する側寫眞の研究に熱中した、其頃今村銀行支配人の福原允がプラナー鏡玉を所持して素人界に名高かつた位で、彼れ光村は迫々其研究が通例であるに彼れ光村となると原造から何から何迄一切他人に委せず矻々として手を染みだらけにして研究するので其位置を究積み鹿島の全盛を片腹痛く思ひ負けぬ氣で潛勢力を養ひつゝあつた、素人寫眞と云へば例の平岡大盡も一時は非常な熱度で本町の小西商店も其注文に閉口した位で有たが、其萬事に先見を有し切上げの早い性質はサツサと極度迄遣付け他の方面に移るので、寫眞屋は少々物足りぬ心地もしたのであろう、扨も光村は赤阪見附の柴田を顧問として次第に手を廣げ戰闘準備に怠りなく將來の寫眞通は乃公なりと窃かに悦に入つたもんだ

（代　千）

▲其熱心る加減、中通の所は兎も角、鹿島や光村などの金力家となる、小面倒臭い下仕事は人に任かせる評が高かつた、又活動寫眞彼の X 光線の本邦に來るや鹿島も度々試みたが、光村の方が出來榮えよしとの評が高かつた、寫眞に至つては光村が日本の元祖で、即ち去三十二年初めて撮影したのである、次いで寫したのが大阪の白井勘造、荒木和一等で其次ぎが東京の廣目屋の奥行であつた

▲和洋折衷音樂　寫眞の外に音樂の道樂も

▲今は銀行員　彼れは前來述ぶる如き一種の大道樂家で寫眞と音樂の爲めに盡した功勞や沒すべからずだ、博文館連中や文士界に素人寫眞の勃興したのも彼れが原動となつた次第で、博文館の故乙羽君や水哉君なども鹿島の造方を見て初めて趣味を感じたものだ、而して彼れが失敗談は今更繰返すの必要がない、唯々彼れが大金を散じて騷いだ結果が今日の流行を來したる譯であることを記すに止めよう、尙彼れは健在で而かも謹愼的に某銀行に勤めつゝある

擇ぶなども中々功者で商賣人も恐縮する位であつた

▲軍艦撮影の一手占　神戸へ歸つてからは海軍省へ交渉の上軍艦を撮影し來つたが是許りは光村一人で他の擧ぶべからざる一手占である、神戸へ入港する軍艦は忽ち彼れの鏡玉に擒とならざるはなく、彼れは艦

▲**西寫眞會社**　鹿島はドコ迄も大家旦那で万事鷹揚な昔時風は免かれぬが、水村は流石に慶應義塾へ顔を出したともある位、同じ金錢を散ずる中にも當世主義の活きた遣方が多いのである、去三十三年に開西寫眞製板印刷合資會社を創立し資本金は最初三万圓後に五万圓に増資したが是は無論彼れの出資で、三ノ宮と住吉の間に一大建築の計畫が或事情の爲めに未だ決行されぬが現在神戸の同會社は中々盛んなもので コロタイプ、網目製板等の職工五十名は皆東京より雇ひ之が爲め長家を新築し特別の待遇法を施しつゝあるので至極圓滿で能く勉強するは世間に餘り類がないと云ふ噂さである

▲**「旅の家苞」**　商賣人が割が合はず製板しきれぬものをドシ〳〵大損して出板するのが彼れの特色で、彼の「旅の家苞」の如き非賣品ではあるが能くも根よく集めたもので日本風景は概ね殘す所なく百冊の多きに達したのである、其他「日本三景」「三都美人」「雪月花」なぞ大金を掛けて自ら樂しみ又ひるものあればすん〳〵呉て遣るのである

▲**「眞美大觀」**　は元日本佛教審美術會より發行し小川一眞が製版し來つたのであるが何分費用かゝりて支へきれぬのを引受たので、美術として最も尊ひべき古畫を精選し其精華を損せざるを是愛ふる迄製板に苦心した出來榮えは夙に識者間に定評のある所である、全部十四冊の豫約金は十五圓で、敢て廉なりとするに足らざれど、これさへ一冊に付き少くも二圓内外の持出しせねばならぬ譯になつて居る

▲**「博覽會圖錄」**　今春開かれた大阪博覽會の美術館内外を撮影するに付ては其筋の許可を得て寫眞場を同館の側に新築し毎日出張し館中の出品は悉皆撮影し之を『博覽圖案』と名付け既に製板を終つたそうだ世間には隨分其一部の寫眞もないではないが安價な賣物であるから無論之に比べらるるものではないのみならず、美術館を此の如く遺漏なく撮影したものは他に類例もないのである

▲**刀劍幷小道具**　道樂は八方に渡り一々紹介する暇もない程だが、就中寫眞の外には刀劍道樂で小道具を合すれば十万圓以上の所藏品がある、此等は先代の遺物にあらず皆彼自身の鑑定より買收したものである、刀劍會は折々自宅でも開くが、世間に名ある刀劍會には必ず彼れ所有の名刀が出品されぬとはない位、殊に小道具の鑑識高く、これは商賣人もお世辭なく敬服する所なそうだ、此等を撮影したもので「たがねの花」なぞ斯道界に譽いたものだ

▲**屏風の寫眞**　カールザイス製の一類プラナー鏡玉（代價千百七十圓）を所持するものは當今では彼れ一人で、昨今上野で開會中の東洋寫眞會へ出品した屏風なぞは從來見たともない遣方で、一双へ五尺の二尺と云ふ細長い撮方、雪の金閣寺、華嚴瀧の結氷等何れも嶄新な景色であるが、世間でマチ出來ぬ所は屏風の趣向である、斯る大業なことは何と云つても鹿島以後は此光村に望まざるを得ぬのである（終）

○昨日早稲田大学で講演をした。森彰英が
来て、こんなことも講演した、久しく彰英しんを
ひさしぶりに見たのである。初回のある、彰
の演題をエンロールメント（黄禍）で彰英奥坂
味のある講演、題でもなく面白くもない
するのひまを潰した、彰英の文のあるもの
集めたものを渡すと黄禍のことを書いてある
うち、北どる佛し猫と人の話書び北の河豚の話
雨もうい流こうちうこ、そんをあれまるの北
とそれが大体を投資した　こうして
一五年前べんりして生所ようとこうこ　こうして頁

[illegible]倫理的なる、[illegible]と黄禍に関する倫理的考察
と云ふ書を著わせり、ヒメンスルナとて
人、年七十年前一部の倫理的考察つくれ
とがあり、その部を少しこゝろの人びと
[illegible]を与る海浜を逍遥さも
うあるべき、厚者の立場を言も海をもさ
ず、ハートとして考へて、[illegible]
内容を論ずるとの、こんを振振して考へ
ることが[illegible]支那の黄禍の起因
[illegible]外人嫉妬心を[illegible]
んを[illegible]人の本[illegible]

十一　田辺

海の体を[illegible]又[illegible]公のとき言義[illegible]
国の政略を[illegible]
人の印[illegible]を捕[illegible]
[illegible]支那の[illegible]
[illegible]支那の[illegible]
[illegible]
[illegible]

清国海軍大将丁汝昌の報告に曰く、
先ず河岸の掛長官と共に
戦傷を負ひ、つづいて一千八百二十一
年間しばしば押寄せたる敵兵を撃退したる
ものなり。河岸を奪ふ悪魔を撃退したる河岸
恐るべき敵を撃退したるものなり。
ものしいことき。
今を捨てしめたること論じ、更に又一隊して
二隊共に夢幻泡沫となりたるを絶対
を以つて誤しりたる支那国の偽記事
戰士の報告は昨日の昨日の者労働者をみたる不

幸にして敗北したる敵の困難なる不安を
推し現ずるものなり。支那の
事を究めん上の新聞を見ずして誤解の計
算をなすを輸出入者を招げたること
若者をみたりと支那の優劣論を論ずる
行なる方向なり。仮令ば比較せしが消滅
なるを事を指を日を支那人をも愛する方
なるを生んを支那の為に赤誠の事
し滋美の欲をかくることなく、故に日本
の事情を知き者を仰を拍手とする中を楽
まるる輿図のアレキサンドル、フオン、ヒブヨン

ず一千八百七十五年の春浸水のとき拓ける紀の国を紀
伊としるすべきもの也北の人を近畿の人と称するも
外交の異なるとなり好奇なるもいまだ学問を勉めざる人物なり此書を書きたる作者
は何ものなるや北人の筆なり海防論中に薩長を多の
改革しきりとを示を以ても薩長人中の
日本を目撃したる事情を察すべし、こんなりもお
もしろき関係なる人の著述のうさんくさきものなり文
面の事情の言葉をもきしるすべきことを
つて結矢とそもそもこれ
著者を上に加るの作を文面を比較

するにあらずやと
著者を支那の黄禍を防衛する手段を論じて曰く
戸一往年欧人うマニラ、バタビアを加へらるるとき暴
力手段をもて新しく開化を完成せしめざるべ
く支那を助けて共の開化を完成せしめざるべ
からず三宝教の貪欲なるを常とす
支那人の要求を満足する為国をなすべし今
日宜しく之を戒飾し一つ教と
而して終に倫理の事を論じて支那を調
す天命を敬上の世界の秩序をとることをも
支那を称して人格の強大なる敬する賛

とあるも本来之報恩の誠を献するを
欲するの氣を慰するを主とする故の因こんを
支くるとあけさるを其の間の事あるを凡を
学者之於て者等ゝの或るあるを問を設る
之印ちダイアローグの式の俗るゝを之ん
ゝを言葉ゝ自らゝの式の俗るゝ
即ちモノローグの式を俗るゝを目也而して支那
の倫理教を地の後者の属を、西洋に於る者は
まゝと部ゝを設さんゝ孫の目らゝ
又ん代徴後人ゝを而して支那ゝ於て之を行
卑屈なし、とて支那の倫理説を以て世

界の上に於る倫理教と為して張論ゝ
地の一部を支那を物は日本を買を教
倫理を支し学人を西洋の河流をゝ
ゝゝんを著者を拙めを其面目ゝ
決して義ゝを潜ん物を為すゝゝ
さゝを也唯ゝんを教を為ゝ人をゝ
絶例せを得ずゝ迫を者ゝ
日本を異様ゝを云しを政治を
支ゝゝゝ大ゝを支那ゝを
りゝと根力ゝゝの紀ゝゝも大ゝを確定れ
西洋に於を天打を者をかゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

瑞西の墨又は其に代用して死骸と共に土中に埋めたり、是れは
の習慣あるひとの人々は死骸を入れ
上に行はれ、或る場合には棺を入れて行
くことの草鞋を穿ける海豆を搾る入れることと
なる。さて其の一滴千金の液を二千五百の
の抽出して其の科学的の者を一七二七年
新鋭し其中に蓄積されて其の事を
試験して見たるが其結果を今日のもの
と全然合成合成分析の結果する點

かつてある、一時は奇妙なる時代を科学上
のを以を研究する材料となる。
一 花のもの中でも柔弱なる紅を
る程を穏色する強者なるもの遂
ば其の色を紅色にしまうが、黄色
はかりはこの燈の解をも変化しない、勿
論花の黄色も大抵固形体を為し
紅色なるものも素は液体であるとも
あるこの、黄色を花を蒸して特殊なる
び、つまると花の原色を黄色であると言つ
てよかろうか

○今一つ植物のことゝ（つき）現今農商務省伊藤高等
が其の研究の結果を公表し以て同好者に
與つたことゝ「ひまらや」山の植物を日本の植
物と同じる類似したることゝ思ひ
ある、勿論ひまらやと云ふのは琉球と共通
色合をもつて北の方地を意味するものゝ
やはあるまゝが結局ひまらやは「ヒマラ
ヤ」山を指す中央亜細亜
を指ける世界の高山である、倫敦王立
学士院の学説によるに「サー、ジヨセフ、フツカー
氏」人を二十六年間北山の植物を調査し

其年研究し以ひまらやの人の後をうけ
北の山を実地植物を研究して、石南属
のうちにもとゝ世界を主とする一るこゝ植物
の西北山は世界のこゝ十七種ある位と
こゝのこゝ、さて日本の種類と類似点は同
一のものを主とするこゝ日山の中腹にある丑寅
第三帝国山脈の地域にあるて、フツカー氏
日本植物九万メートル以上三千二百メートル以下を丑寅（第三）域とし
丑寅第三帝国山脈（第三）域とし三千六百メ
ートル以上のものを寒帯（第三）域とし、伊

回 森場さき琉球産にて本土の植物に
てうやぬのうちと類似産にては同一の者二十種程
ありしかるに、これを吟味例えばつくばひあつて
追々元祖の類似産にては同一のものの
あるべきようとなれども、全体支那さしてやう
ものの中にて花し植物分布と密接の関係ありて
上海山も動物の上 ものと密接の関係ありて
支那にて類似のものもあれども而して
えきさき奇と謂つべし而してやう山とは
の類似せるものもいまだ類物のえきを動
物の分布にたいする類似しるとえ今度

類似産にては同一なる若干の例を挙げんに（第一）
屬 ぶなをきばば屬 みやまもしきえ屬
はるかいえ屬 きくあり屬 等あるも又種を植
えるもようきえ、さいえい等数あるも
而して伊豆場さう例産にて二十種の植物名を挙
げれば此左
リあをつばいらあ 琉球産ありまるり(ヒ)及(ロ)に産
(2) くすのはかえで 琉球産 及(ヒ)に産
(3) おほばうりかえで 琉球産(ヒ)に産
(4) やまびは 琉球産ありまるり本州にも産
(5) りうきうえやまとべら 琉球産(ヒ)に産 (6) きやーしや山に産

(6) あをき　　琉球ヒとゆうて（ヒ）を変化
(7) まるばるりのき　　琉球、ヒ芽と言うたり本土うまれ
(8) ちまつばうま　　琉、主、ヒと言う
(9) こがねあさぎ　　琉主（ヒ）と言う
(10) おきなはまとらのを　　琉（ヒ）印と言う
(11) おきなはくさぎ（ちゃん）　　琉（ひ）印芽と言う
(12) やへやまちうえひとく　　琉主ヒと言う
(13) うらちうえのき　　琉、主（ヒ）印芽と言う
(14) やへやまくまがいさう　　仝上
(15) のちん　　仝上
(16) ちんかくちん　　琉、ゆう本ノ（ヒ）印と言う

(17) おきなはちんこくちん（ちゃん）　琉（ヒ）印と言う
(18) ちのよ　　琉、ゆう本ノ印と言う
(19) たしろし（ちゃん）　　琉（ヒ）名はかーしや（印）と言う
(20) やへやまうらしろ（ちゃん）　主、（ヒ）印芽と言う

○帝国ちゃの人類学を研究する記　金子訳

うち考古の研究を解する一通を大学の人類学教室の列品を見たるを思ひ、研究士と教授して其の研究を得たることを感謝す、いろ〳〵の石器ひいては果さうつたかそれを決して夢遊半を出

得て出うけれど、幸に坪井博士の金石文評釈の説明をさんこのび見れしことものたるもの、今日当時に為し得ん事は出し遺こと人数子の標本を二ケ所あるを一を取扱事新宮を迄ちて棟ぶけう異なるとこと、えんを平なるを迄ちて狭いけれども、よいものが陳列してある、一を右方新の迄で（三階位）理科教場の前面にあるも一のたるも大きなるものなる先づ平面迄の一を出ちも如何うに先が

出て迄陳列してあるものを筑前の人新宮の迄つてあるこをの平板石びやうがなる庭を破壊してたる新の中の分うの刻したあるが、よくてこうえんえる紙をつる人うある板みびが坪井を石の新を刻みテる新えを中を刷てあるを矢筒ひあるうとこのたる、第るに、この設を分えを刷てあるこの矢筒の数の思なる、迄し坪井の解釈うあつてたるのひあるう

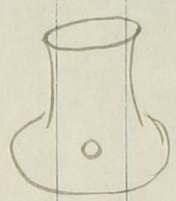
なる陣うち石槌う二ツ三ツ並ちびてそうた、一ち
番西又なる方面の寝槌ひあるこの小型の槌と
又なん形るか形ひある、今一つを多うめの山
き形ひそうう〳〵大きいなるひある、塩井の説な
るる石槌の主流なるを山城あるそうを
めそう〳〵しもなて偏陳ようない、なんを必
竟御寿色くそうを自う官親分限の
定めう家格ひあるこの厚義を設さるう
つとひあう〳〵偏海しを左松なのやうまい
いそうもないみある自うを手段の望義の行
いのとうひあう〳〵とそうめてそう

石槌る次て馬の走偶うう三ツ四ツ設列してあ
る、馬うを鞍のを主いてあるのを重いてそうい
のをうある、そこひあるを渡べてそうを頭を
るかさ〳〵完出してそうるるうあるも、よく
くそうを餘の投るを形うを四をおろけるん
える、塩井う設石を求めとくば、そんの
馬鐸をづう下けとと京の宮実ひあるを
て、そさ〳〵馬鐸をを石を宮のもを義四
て示さんそうかいうるも切る面るを馬鐸と
形う同いのをそうおう、女の鈎角を刻し
てあるめる仮まひそうつくるを馬の頭を

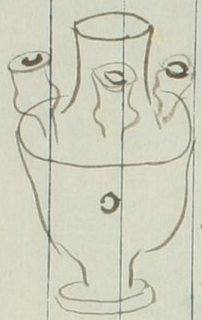
る模してあつたので、馬鐙を用ゐられた様
なことを得た
次に八二ワ人形ひあるが、凡そ七つ八つもいろ〳〵
のものが陳列してあつて、えんぎものとしてのもの（金鐶）が八ツ、（金鐶）うち六ツを両面の人が
ものみすごとく耳の飾りを用ゐられた
一寸ものあつて、土偶の耳のものを模したものを飾つてゐる
ものあるも〳〵とまいうことまを飾つてゐる
故ふうそえる、仮しに男女とも用ひる飾
つとえるものこんをの耳のものがある仕方も一旦
（金鐶）が（金鐶）を通し、耳のもの穴を穿つ

つて其紐を通したものと思はる、点線の
土偶の形の様の物を載せてゐるのが見えた、
物を今形のことく物のもいるものひたる
恒を一寸九分ものもさ〳〵
高さ四倍も五倍もある位の長い崖びも
る
此度の用品を梱にいつも第てもあつて
第下つた浜山土器を陳列してあつたが
大抵をもつてゐる形ひあるが、個物は
浜山の土器をの今数しもちゐて
数心の裏面ものようにうつて彫る

面白味のある、此の土器の深さある中ひ正
素朴なる形をそなへ一品ゐ出でそなへたる埴
井の説明を語るものにそなへたる図のごときそれ
其の胴中に穴のあるはけだし、なんぞ
こは、此の器を大抵五合位も這入うと思ふ
七合ぐらゐ位も這入うと思ふ
ねどのいう多くは、埴井の説明を
ゐる延喜式の西国の半挿と云ふもの
ゐる延喜式の此の半挿のことを書いてある京
ゐる竹の管長五寸を添えて献す



ゐる、あるものを以てそなへたる此の器を
即ち半挿ひ穴ゐ竹の管を通すみある
家つたゐるものひ、管を口のもくみ酒を吸ふ
一種の酒器ゐあらさるるきゐ、現今朝
鮮ゐるインペンクとそなつけて之れと同様の酒
器を現今用ゐるゐ例「陶匜」と呼ひてゐるゐ、又此の器を通
「陶匜」のやゐ注ぎ口の入るものゐあるも、即ち
此大ゐも、図のごとく口の
角角ゐいくつも種埴様
のゐるつきそなへたるものこんろう



（上図）

坪井の考えは口の周囲のふさき土瓦てき
巡〳〵、竹管をさしつらてあるんと、
まるうちに大抵の天之の周囲に設備
も自つうう必要あるんう、高前之之のへ
うう〳〵を流〳〵〳〵
管をさす、穴のめぐりにものの〳〵元出してる
うのあるこごを設備のうちを掘出し得とる
うく特徴うて他にも出るうの
面平うとうとうの一つうう
税部も十数個所列してあると、坪井の説を伝ふと
うのを依み取れつたうのあるうう、そして池のこ

ちき流動物がうう入口のたうのたてうく、数数の
ことき抜物も入んたうのを思んる、又北の高の
掘を見ぬき掘を八うでる口を仰向けに置く
ぶうう図のごとき位地に抜えんたる地
[illegible]
此、もて不〳〵と或を照を抜を置えたうし
くも思んうると坪井の説ひある
坪と此の家の右側を流山の四周石鉄
や鉄点をの掘る小さな口ぶ陸列してある
あるるうくうて一々調べてるこうう出来ふ
うとう、中うたて抜を抜〳〵くあして

えるのミウ四ウあつた、即ち耳飾玉時代の麻織の断片は[illegible]四つ方形のものの二枚う信[illegible]と
して弱つてゐるまを人をしてを不思議うまもしめ
たが、えんを金属の装飾具の附着してそこに
みえる「ロリショウ」う深山切んをついた、その「ロリ
ショウ」のとんを[illegible]不思議をうる点共の所
体を維持してとんをえる沙を土器の曲玉であ
るが、えんを合[illegible]曲玉の擬して石製品の如
き作るとんを作つたえのとんをえるとんば穴
も穿つてあるが裏まも男子[illegible]してゐるが点
は此の石を古墳うら掘出したのでゐる、墳ふ

うら出たうう、えを倫敦大英博物館に[illegible]
断するこのこと出来る。この[illegible]の牲[illegible]
郡寺長田郡もある、唐玉曲玉の所と名と
の[illegible]一[illegible]しを[illegible]
凡の所とつたえのひある、えんを倫猛獣の
深山の者いで、えんを胸をゐの言葉を流
の装飾としたのが、追[illegible]して玉で共の
所を模する様をゐろとのであるう、えんば共の
色のことも飾玉の獣毛の爪の色の様
繁ゐるまるいも、その一流とゐすべきえんあ
の次を石器の内で長さ二寸程のゐで小刀の

鞘に入つたまゝの刀を持つたまゝ、ある、こんな金の加を見たことのない、六尺も裝飾用の長刀を持つたまゝ、しいらるゝのあつたのは、素人七ケ條あるうち上上上、ヤツトコの棒を使はしたのと、武術の技術、二尺五寸程ゝゝ抜き挿しもの、又等身も深山見たいの様な、又竜金の棒を使はしたのと、流儀のあるところ、見いはいたのと、二尺五寸程ゝゝ竹を割ゝゝ断つたのゝ所あるのと、ちうとのあつたのと、井の流の流のば、おくえんを呼ぶ玉と云

ものゝ事なり、竹玉のことゝゝゝん又現在琉球地方に於ても竹を断つたのを為すつゝきの作に使用してゝゝとゝゝ事なり

此の一京の陸列帯を大抵次ゝの如くつゝ、

玄ゝんゝゝ一つ目の入つたゝゝゝ、土石等の

ふの中地図（りゝん）う掛けたるゝんゝ使つて見

ゝ城内行流のゝ有ゝゝゝゝ有ゝ所のゝ

ゝゝゝゝ、或ゝを今布ゝ」う一つも見ゝゝ

のゝまゝ見ゝさんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの

日ゝゝゝゝ、始ゝ徴ゝゝゝ一様ゝゝゝある

他の陸列場へ行くの金中一人数学長京の狭い京

ありて人骨と混合う野〻に散列してあるを見
た、人骨を先年芝の田山なるを掘出したと
ころと貝塚ありて出たことがあるが、貝塚ありて出た
四肢骨などを問ふに三寸あまりもあるを折てある
又骨を附のままあるに肉を元ちんとをつけた傷
もまたあるを見めらるゝ、こん等のまま
実ともに推しても火塚人種を人肉を喰つたと
云ことが分る、又野多の酒瓶を一見新ら
しく見えれども赤みがかりたる稲を常ひて
ある点に於ても移殖も考へる土器などを
大分異なる特徴もある、こんな事をの

移生所にうち掘出したのう加まるとも芝後年
の掘るを記るとも出るところに分れ、ある種のの
説を附のないのを、人類学の表面を今でも
弥生式の土器と呼んでもよ
ろしきも土器の形状は表面に紋を付
開けて入れ、直ちに形物を出来てあるに
数の土器は石斧の類を、即ち死の一
とを見塚人の製品の形別はあるを、第一目は
入つたうち数の石斧のあるを始めて
産出物のうちに多くある私中にあるを四尺
三寸と一分共の重量を十一貫目のうちの一本ある

きゞをうして好るものあるの者にあるもの、とれを元論
実用を供しにうるべきものにあらざるべし、或を紀念しるべき
作つにうるものもあるべうう、来人を送るものを門前に
飾る羽織をうるしにうるものもあるべうこれも五四に
使しにうるものあるべうて、又貝塚人うにん自分を
模しに四五寸位の土偶や岩版土版
をもつて人体を彫刻せるものもあり、海山の陸列
しにあるにうるものを得る貝塚人の
風俗も察するべうる解る様ひある、生活の為
物の人形を遺元者をもつてする、元も北の遺
元者を雪の中元のものあるを作り掘出ひ

るべうう雪のあるい土地例へは兵庫県佐
掘出しに人形を北の掘出をもつてそ
又北の人形の姿を模しにうるべうる
方の者しく完出しにうる、点線印らしいも
心心えにあるべうの彫る異様なるものに岩版
土版の彫刻しにうるを大さ巾四寸横三寸位も
あるべう、特に方形のものあるべうが一隅の
紐を通すべき穴うを穿つにある、四つの人形も
北の土石版の人うに一種の迷信よ
を護符用の肌身離さず所持しにうるの
せるべうて、北の岩版土版にうるべうの顔の

蛇足なれども十五口の両側に菱形の懸
るの図のごとく彫りあるものあり、これを懸
ひもとの事なり、事実の意味や無用なれども
飾りとして用ゐる鈕を
ハッキリとんぼりあるべし、貝塚中にもあり
田鈕を為拙しとしても
さぬの海列島に出でざるべし、現在一双の鈕
を発見したるに小さき
ものにて中央
に穴を貫通してあり、紐を口を通しこれ
んを繋くものにあらざるべし、黒しこれの意味
のごとく南洋土人などの用ゐる飾鈕ひもの

とすんば貝塚人がこれを用ひしとのことの出来
てあるべし、造り口を貫ぬきて菱形のあ
身上も鈕にも同じんの、紐をのしく西洋の
鈕と違う様ひあるべし、
これをのしく西洋の
ものにあらざる
同じ人種の作りし石斧の数ひも細紐の石斧
う形はなるべしとある、ひも細紐を
とのものにあるべし
図のぬき紐を
ひもの後世
ひあつて原紐を
蛇の紐を掛しにな
意彩る工風をなすべ
蛇の石斧ひあり、
自ひの

要する所のものにて、四五寸中をへこましてお
うぶは、うく困るうゝ便利上此の
形を造りもとゝのひあるゝ、そんを後世石器の
へうもとのひあるゝ、又皮紙其他木ゝの類を
切断するゝもの石斧也山海山之ゝ唯此一寸角
甲 ものゝ思つとの造作法金の斧
うあつとゝ、そんを図のゝ中央よ
り石ひすもの切つて二つすべき様な
ものゝ二ゝ切断するも
乙 ものゝ大分深く溝う堀つて

ものを造る石斧の製作法の
一端ゝ知るのひあるゝ、絶下に此の石器ゝ材
料のと摩製のと二種あるゝ関係ゝ材
料のゝ多くゝ抜出さんゝ奥あゝ
料のゝ多くゝ出るゝ所ゝ同じ貝
塚人種ゝ奥あゝ住のゝ大分異
なゝ工義ゝ異なゝ
うてゝ
次ハ土器ゝ材料ゝ此の一定の海列数のゝ
ゝ土器ゝ造ゝ所ゝ定ゝ産出ゝ、そこ
ひ此の人種の手ゝ出ゝ敢彼ゝ酒此の土

器の細工のひあるて、祝印一流の特徴と較べて
又きと大分違を異すること、第一輪ろ
くろを使つて挽くときに落ち手びつくねて
ること、第二焼き方を別の窯でするこ
とと、第三山口目の印しあること
第四曲線の撫挽又一種の特徴あること
第五把子を付けること、第六撫挽を終しあ
ること第六撫挽を終しあること
等で此の人形の色々の特徴と土器の特徴
とを共に著しくあるもの数、特徴の
此のいくつかの特徴を有して有る武蔵

すること把子の挽の痕の高さ
ことに、雅政風顔の捕すきまの
ちがいを賞賛するの傾がある、又器面の
挽のいろいろ風をんとそろて決しるも此
ひきろい、中を丸ひめを抜めたんと思
此のを秋田ろも採集した土器のひ、小
さき香炉のこと挽をしたるひあるの
挽痕を残すもの。此の如くそろて、ん
う只場人の心えとしても住せんを住
えのひある、又絵しるを丸を三種用えて
ある、即ち朱と丹と黒のうつて赤土で、

朱の色をなるものとのしもまじりてそなはり、
原産のまま北の人種の持船や櫂や把手などの図
を集めて図譜を作りたれば、開拓人の意匠
を資くることもあるべきと思ふなり
北の海辺諸国を外国の土産や石器多く
集めあつたれども、石斧や石鏃の類は左の如
異なりて、そなはるものの一の金属を根
として格段の大きいと云ふ点にありて
る、尤も石器の製作、そなはりて自
ら其の品も異るべきにあらず埃及の先
史時代の石鏃数点のごときを漢よ

り拾ひ出したるひあるそうたが分かれ赤
色を帯びたる拾めて光沢のある石ひまこ
とにうつくしいものひあり、又たしう埃及
の石器の内にあつたうと思ふものが石のふつの
ぬきとなる鉞用を成盛つたものに二ツ三ツ見
えたり、土器は形ちを分ちたるものあ
るようなれども模を異ふ
ひあるる

北の土産の掘上げ北海道アイヌ族琉球
島及び南洋等諸人種の風俗を知る
ことのできるものとして衣服飾品の類

よりも二寸ばかりの横巾にて長さ俗
いうさんさく、日人とも唐橋の産あるさ
らしめらるる、国うも一々那覇品騰
元能くすと云ふも、なる一三所くらく思
（さきのうを去るきつけ紙う紀念と
ちさん

一シヤヴア嶋民が娯楽の具とする線和
人形と鬼狐獅子男女の形をひと
書くうき其の形くくぬき極彩色を
施して手足を動をつけて自在に動

くはるるもセーしるるるが、其の彩色の
有るるるが、
とる後、こんを一刷るを喫
且つ之れ我邦の芝居用ある
るるくき駅
一琉球の形絵いつのも数字る代用る
るるる形前る異るるメ絵のごとき
あまに作り（ちるるる
又カンナーズミ指を喫るる形を曲る
とる角の指（具）も数量を細うる紀
——あるる即ち一個を産れば左の如

千る於　をる四十又

田　十　一・八

地のみおをしヨーチユーマとゝぶ

一蓙　五の石斧　七ツ個

蓙五ツ石斧を用ひしことを知る書物

ゝゝゝ

○北陸の新聞紙の種々の風を解説する読者を楽やさんとする、廿の一題を掲げ料え、番朝投稿の二等賞、無事庵出しの題意の方法を考へ指示べし、

[illegible] の賞品は富士屋田の[illegible]

[illegible] 投稿の[illegible]

[illegible] 点番朝[illegible]

賞さぐしの文字を、左の如く附せし投稿の者と[illegible]

[illegible]「圏点」のある文字をいふ

会員判[illegible]（ウエゴメスイトウテウニレカドノカミユイトヨ）とある文字を得べ、[illegible]を

新案大懸賞回答方法

賞益と趣味とを兼ねたる本社大懸賞の新案は一面に記載の通りなるが左に其の實行方法を明示す

▲回答の方法　十二月一日より同廿九日に至る報知新聞に日々掲載する各種の廣告文中に毎日必ず四號活字以上の文字を以て殊更一字宛誤植し置く文字あり例之

岩谷商會の廣告文中に　日の山
村井商會の廣告文中に　オーレード
千葉商店の廣告文中　菊　卅　界

とあるが如し「山」は「出」「レ」は「ル」「卅」は「世」の誤りなるとは何人も了解し得べし

此例に依り毎日**特に誤植し置く文字一字**宛を探し來廿九日までに廿九字を得之を往復はがき往信の部に日附順に従ひ住所姓名と共に明記し返信の宛名の所にも回答者自身の住所姓名を記し報知社**廣告懸賞係**宛にて差出すべし其返信に自己の宛名を記入せざる者は一切返信を發せず没書とす回答期日は明年一月十日迄（地方は十五日迄）に本社に到着したる者を有効とし其後の分は一切無効とす

▲調査の方法　右送致の回答は順次調査の上二十九の誤字を悉く探し當たる者には合格號番を附し相違せる者は單に不合格と記し差出人に返附す

▲當選の方法　明年二月十日發行の官報紙數（即ち百數但附錄を除く）を以て回答はがき總數を除し得たる數に相當せる合格番號を一等當選者と定め二等は一等番號に一千〇一を加へ三等は二等番號に一千〇二を加へ順次此の方法に從ひ五十等に至る當選者を定め二月十五日の紙上に之を發表して賞品を贈呈す

注意

▲二十九字の誤字と雖通の誤植文字を混交せざる様に注意し要す殊更誤植し置く文字は其廣告に就て最も主要なる文字即ち其の廣告文は主なる効

◉萬朝報精讀賞　寶さがし

拽す可し　拾ふ可し

萬朝報ハ西洋の新聞社界に目下大好評を博しつゝある「寶さがし」(Missing Treasure)の新案を輸入し、讀者諸君のお慰みとして今月今日より行ひます、其方法、左の如し

▲萬朝報は或る場所へ寶を隱して有ります▲場所は此の朝報を能く見れば分ります▲分つた人は直に其場所へ行き、其の

※誠は店名の類字中に多くあるものと知るべし
▲二十九字の謎積文字を正當に探り得たる者も回答はがきに日附順に記入せず錯綜遇突せしものは無効とす
▲郵送上の規定に違背したる者は自然無効に歸す
▲本件に關しての照會には一切本社は回答せず殊に電話の照會は一切謝絶す若し郵便の照會中一般の注意となるべきものは本紙上に於て說明すべし

寶それ取りなさい

▲注意　初めての事ゆゑ少々天機を洩します、場所の謎ハ本紙の文字の中へ、精讀者にだけ分る樣に挿込んであります△此度の謎ハ三日續きです、昨日と今日との分を見附けて置き明日の紙上の分と一緒にして寶なさい△場所ハ東京デ、地の下三寸(或ハ五分ほども知れぬ)ばかりの所に在ります、道具無して指先で掘出す事ゲ出來ます(けれど道具を用意して行ッても宜しい)△寶ハ小判形のものです△本社へ持參すれバ勸業債券一枚(額面廿圓、千圓の籤の附いたの)と引替ます△序ながら昨日の謎ハ十一字でした今日のと明日のとハ、言はぬ方ゲ樂みでせう

十一　田辺

◉机の塵　加藤高明ゲ自宅に晩餐會を催ほして政進兩黨の首領を招待するといふ噂を聞いて、警視廳から加藤方へ、時節柄物騷だから警護をさせますと言込んださうだ。内心の入たとだ△渡邊朝十郎ハ紐育の市長選擧の時、日本の大政黨政友會の選擧視察員といふ觸込て其の選擧場に入込んだゲ、總ての新聞に叩かれるタマニーホールゲ勝つた、改革派のローゲ市長でアつた時も亦弊政ゲ有たうら、東京市會で市の批政を改めるなどいふ連中も當にならぬと感じたサうだ、星亨の子分に相當な見識でないう△鳩山和夫ハ内心參議院議長を覗て居るゲ是ハ例の春子夫人ゲ、大臣のお鉢ハ容易に廻つて來ぬうら暫ら議長になつてお置きなさいと智慮を入れたゲ爲めだとう△木村鷹太郎からプラトーン全集ハ拙者終生一囘の事業で終りの初めのとの品隲ハ買冠りだと謂て來た△韓人閔元植といふ十七歲の少年ゲ上京して室町の名倉に泊つて居る、年の割合に書ハ極めて達者で、詩も咄嗟の間に

歴史を編纂するときの材料に、多き左の通りなるべきを記し置くこと

○八数の雄蕊無稔性花を生ずることあり、植物のごときものも

自花受粉を特別の方法なくしてもなしうるもの、

多くは花粉の落ちて柱頭に接するなり

スプレンゲル氏は昆虫と植物との間の関係を詳細に観察し、人工的に

花粉を柱頭にフウロサウに

詳細なる研究をなせり千七百八十七年発行

十一 田辺

数の花冠のあるところの細微なる毛茸を観察し

進化を説くにあたり、花粉を運搬することなけ

れば、たとえ雨露のあるも花蕚の流液を防ぐ

ごとくしと考えたり氏は特別の花を観察

して益々日光熱を吸収する関係あることを

多数の植物に於て雄蕊と雌蕊と

各別なる存在することを同一花の中にも雄蕊

雌蕊の成熟の時期を異にするものあ

り自花受粉を免れ他花受粉をなさ

んとするの方法なりとなす

フリッツ、ミユーレル氏は六角形の花の解剖

（つきて

雄花しべ[illegible]花の自花受粉を[illegible]植物の[illegible]
植物に不利[illegible]或る種類の[illegible]の花[illegible]に其柱頭[illegible]
自家の花粉の附着[illegible]
[illegible]屢々之を毒花セしもの[illegible]
[illegible]氏は種々の花に新しく実験し自家の花粉
の附着しやすき花早く萎んで花粉を柱頭に
[illegible]変[illegible]
粉を受けさるものも異変[illegible]
自花受粉の不利なる[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ウサン氏[illegible]

Pumpinnay

[illegible]植物[illegible]

受粉[illegible]七吹の[illegible]
[illegible]自花受粉
[illegible]五吹四吹[illegible]

此の如く自花受粉を実験[illegible]植物のみ[illegible]
しき不利なれば植物を種々[illegible]
之を如何[illegible]
[illegible]左の三種[illegible]

第一八 一の花の中に雄蕊雌蕊の具はら
さるものと其雄花と雌花と四一の植物
[illegible]之を雌雄同株と称し[illegible]

各々異なる植物なりとす雄蕊異株と称す

第二はスプレンゲル氏の称せしところの雄蕊、雄蕊共に同一の植物なれども各々其属の性質を異にするものなり之が為めに自然の花形を同一花の柱頭に附着することなり故に雄異株とは即ち天南星属の如く雄蕊のみ雄蕊ともの、雄蕊のみ雌蕊ともの、雄蕊共に雌蕊共に雌蕊共に雌

もちゐる事を忘れ
○仙人掌（サボテン）と云ふ物を拾ひ来たりて
拾ひ来り吸ひもちゐし事を聞
を幹に吸ひ出す事、恰も仙人掌に蜜を吸
ふと云ふ事を思ひ出して云ふ仙人の名の付いた
のであらうか、いくらも仙人掌は拾ひ来る
此の物はメキレコの名前であつて其の長さ
は三寸程あつて、肌は針の出て
ゐる物、或は之を用ひて吸ひ出す
驢馬は之を株に巻きつけて
とるのを、まづ一番に加ふ、帰りて云つて幹

を充分に踏み、之に軟らかなる
踏みたる物を例へば、豆を毎度帰り踏み
しめて、まづ瓜が殘れば拾ひ集めて
び、そこに内部の甘い軟らかい肉はもとの
ままで

十一 田辺藩

以下全て

白　紙

明治三十六年十一月

下浣起業

[illegible]